Mahāyānasūtrālaṁkāra における菩薩行の構造
——第VI章 tatva を中心にして——

早　島　　理

これまで野沢静証，宇井伯寿，S. Lévi 博士などの諸研究によつて，Bodhisattvabhūmi (BBh) と Mahāyānasūtrālaṁkāra (MSA)[1] の章題がほぼ完全に対応すること，MSA の構成と MSA, XI kās. 61～73 に説かれる 44 作意が対応することなどが指摘されている[2]。それはおそらく，瑜伽行派の人々による大乗の様々な菩薩行の体系化への努力を示すであろう。そうして，そこにおいて瑜伽行派に固有な「菩薩道の哲学」の展開過程をあとづけることもできるであろう。この稿では MSA（そのうちで特に真実品）と， MSA, XI に説かれる 44 作意（特に第 4 信解作意）を取り上げて検討し，大乗の様々な菩薩行と「菩薩道の哲学」との関係についていささか考えてみたい。

BBh にも共通する MSA の章の構成について安慧[3] は，「MSA の論体を説明して，『種姓位にある菩薩は菩提心を発して菩薩の学道を学ぶべきである』と説いたが，その場合菩薩の学ぶべき学道とは (1) 何について学ぶのかの対象〈yatra śikṣante〉(2) どのように学ぶのかの修行〈yathā śikṣante〉(3) 誰が学ぶのかの得果〈ye śikṣante〉である。」[4] と述べている。BBh も MSA も，このような三つの観点から説かれる学道をもつて菩薩行を体系化せんとしていると言つてよい。今，MSA と章名を一にする BBh の uddāna や MSA, X kā. 1 と XV kā. 1 の両 uddāna，さらには MSA 世親釈各章末の文章（序数を有する I～XV 及び XXI，序数を省き〈samāptaḥ〉の語を有する XVI 以下），MSA 安慧釈のいくつかの文章[4] を手

1) S. Lévi, "Mahāyānasūtrālaṁkāra, tome I" Paris 1907.

2) 野沢『智吉祥造 "荘厳論総義" に就て』「仏教研究」第 2 巻第 2 号所収，宇井「瑜伽論研究」(東京，昭33) pp. 43～81, Lévi "Mahāyānasūtrālaṁkāra, tome II" Paris 1911, pp. 7～16.

3) Sthiramati "Mahāyānasūtrālaṁkāravṛttibhāṣya" (MSA-V) Tohoku No. 4043 (D 版), Peking No. 5531 (P 版).

4) MSA-V P. 84a3-5, D. 74a1-2 など, cf. BBh (ed. Wogihara, Tokyo 1971), p. 22.

掛かりとして，MSA の各章を三種の〈śikṣante〉にあてはめると〈yatra śikṣante〉は〈pratipatti〉，〈tatva〉，〈prabhāva〉，〈paripāka〉，〈bodhi〉の各章に，〈yathā śikṣante〉は〈adhimukti〉，〈dharmaparyeṣṭi〉，〈deśanā〉，〈pratipatti〉，〈avavādānuśāsanī〉，〈upāyasahitakarman〉，〈pāramitā〉，〈saṁgrahavastu〉，〈pūjāsevāpramāṇa〉，〈bodhipakṣa〉の各章に〈ye śikṣante〉は〈guṇa〉，〈caryāpratiṣṭhā〉の各章にそれぞれ説かれる。かように種姓位にあつて発菩提心した菩薩は，自利利他の六波羅蜜行・真実・威力・成熟・菩提について学道し，信解・求法・説法などによつて学道していくのであろう。

他方 MSA, XI kās. 61～73 の 44 作意について安慧は次のように言う。「先に(1)種姓位にあるものは発菩提心すべきであると説き，(2)発菩提心しおわつて，(3)自他の利益のために六波羅蜜を修行し，（自利・利他の修行の）共通の結果を祈願せんと作意すると説き，(4)自他の利益の為に正しく修行するものは，その故に雑染を離れる方便である真実に通達する為に菩提を信仰せんと作意するのである，と説いた順序の如く，次にあげる全ての作意についてもまた『ひとつの作意の次につぎの作意を説く道理がある』と上述の如く理解すべきである。」[5] これによつて MSA の各章がそれぞれ 44 作意に対応すること，したがつて MSA に説かれる様々な菩薩行が 44 作意の次第に従つて展開することも察せられる。そもそも 44 作意とは，「根源〈dhātu〉—すなわち菩提を正覚する種姓・種子あるいは六波羅蜜の種姓・種子—を成長させるための，波羅蜜に伴う作意」[6] である。おそらく MSA の様々な菩薩行は，一言にして言えば，発心し，真実に通達し，六波羅蜜を修行して無上菩提を正覚すると言う本質をもつであろう。

ところでここに言う「菩薩道の哲学」は，MSA, VI に説かれる。この章に対応する第 4 信解作意〈yathābodhādhimucyanāmanaskāra〉（悟つたままに信仰する作意）[7] について安慧は言う。「三世の諸仏が六波羅蜜の修行によつて無上菩提を証得したように，私も六波羅蜜を実践して無上菩提を証得せねばならぬと廻向して心において修行する（citte 'bhisaṁskaroti）」。[8] 即ち，「六波羅蜜を実践する時に雑染に繋縛されていては自他の利益を完成できない故」[9] に無上菩提を証得する手段として「雑染を離れる方便〈asaṁkleśopāya〉である真実義〈tatvārtha〉を体

5) MSA-V P. 227a2-5, D. 205a6-b1.
6) MSA p. 71 ll. 1-2, MSA-V P. 224a7-8, D. 203b6.　7) MSA, XI kā. 61.
8) MSA-V P. 227b1-2, D. 205b4-5.　9) MSA-V P. 226b7-8, D. 205a4.

得せんがために，この信解作意を説く」[10] という。「真実義を体得する」[11] ことこそ，ある意味で六波羅蜜などの根本条件であるだろう。それでは，「真実義の体得」はどのように説かれるか。MSA, VI は，kās. 1-5 で勝義諦と世俗諦を，kās. 6-10 で菩薩道を説くと考えられるが，おそらくその二諦の真実が，菩薩道において体得されて行くことを説くのであろう。安慧はこの章の内容を「無常・苦等を如理に作意して〈yoniśomanaskāra〉，顚倒を捨離することにより涅槃が証得される」[12] と要約する。如理作意が涅槃証得のための菩薩道の中心であることが推察される。ここではかかる意味の菩薩道を「菩薩道の哲学」であると考えるのであるが，それは資糧道・加行道・見道・修道・究竟道の菩薩道である[13]。そのうちで特に如理作意を実践するのは煖・頂・忍・世第一法の四善根位よりなる加行道である。煖位では「顕現を得る三昧」〈ālokalabdhasamādhi〉により「対象は概念的思惟のみである」と知る。頂位では「その顕現が増進した三昧」〈vṛddhālokasamādhi〉により「外界の対象は心より顕現したものである」と理解する。忍位では「真実の一部に悟入する三昧」〈ekadeśapraviṣṭasamādhi〉により「心のみに安住し客観〈grāhya〉を離れる」。世第一法位では「無間三昧」〈ānantarya-samādhi〉により「主観〈grāhaka〉をも離れ，主観と客観〈grāhya-grāhaka〉の二つの執着を離れる」のである[14]。以上のように加行道の四種の三昧において，いわゆる入無相方便〈asallakṣaṇānupraveśopāya〉[15] を修行して見道の無分別智により法界を直証するのが，涅槃証得のための菩薩道の中心である。またこの入無相方便の三昧実践次第が如理作意の内容であることは MSA, XI kā. 42 よりするも明らかである。即ち MSA は同 kā. 36 で〈lakṣya〉(識論)，〈lakṣaṇa〉(三性説)，〈lakṣaṇā〉(菩薩道) を説いて，菩薩道の哲学を確立するのであるが，〈lakṣaṇā〉の内容として kā. 42 は〈ādhāra〉，〈ādhāna〉，〈ādarśa〉，〈āloka〉，〈āśraya〉よりなる五瑜伽地〈pañcayogabhūmi〉という五道と同一の体系を説く。安慧はその〈ādhāna〉を註釈して「如理作意によつて加行道を説く」[16] と言う。その内容は，

10) MSA p. 71, ll. 14-15, MSA-V P. 226b7, D. 205a3.

11) MSA-V P. 48a2, D. 73b7.

12) MSA-V P. 89b1, D. 78b1.

13) MSA-V P. 89b7-90a2, D. 78b6-7.

14) 以上四善根位の内容は MSA-V P. 90a1-94a3, D. 78b7-82a6 ただし四種の三昧の Skt. は MSA, XIV kās. 23-27 (MSA p. 93) 及び G. Tucci "Minor Buddhist Texts, pt. II, First Bhāvanākrama of Kamalaśīla" (Roma 1958), pp. 223-224 に依る。

15) G. M. Nagao "Madhyāntavibhāgabhāṣya" (Tokyo 1964) 第 I 章 kās. 6-7 参照。

「煖位では『名辞は幻である』と了解し，頂位では『対象は幻である』と了解し，忍位では〈grāhya〉を断じ，世第一法位では〈grāhaka〉を断ずる」[17]と述べられている。如理作意は入無相方便をその実践内容としていることが知られる。このように MSA, VI では涅槃・無上菩提を証得する方便として，五道即ち五瑜伽地を菩薩道体系として説き，如理作意なる「入無相方便—法界直証」を菩薩行の実践過程として説く。

おそらく，種姓・発心などの章に説かれる様々な菩薩行，したがつて44作意に体系化される諸菩薩行も，五瑜伽地の菩薩道においてこそ，修行されるであろう。それらの様々な菩薩行は五瑜伽地＝五道の菩薩道に摂約されるとも言えるであろう。それ故にこそ，摂大乗論などにおいて，様々な菩薩行の豊かさを含んだ「菩薩道の哲学」が展開するのではないだろうか。

16）MSA-V P. 209a7, D. 189a3。さらに安慧は「こ（の如理作意）によつて出世間法を理解する習気を置く〈ādhāna〉から（如理作意が〈ādhāna〉）である」と言う。（同 P. 208b7-8, D. 188b4-5）

17）MSA-V P 208b6-7, D 188b6-7.